

新しい教育課程へ向けて 小学校・外国語活動と中学校・英語で 見えてきた課題

兵庫教育大学 吉田 達弘

学習指導要領が改訂され、小学校では平成23年度から、中学校では平成24年度から新しい教育課程が実施される。さまざまな議論を経て第5・6学年に導入されることになった外国語活動についても、この移行期に多くの学校で実践が始まっている。平成21年度の文部科学省による公立小学校の教育課程実施状況調査によれば、平成21年度に5・6年生で外国語活動を実施する計画であると回答した学校は、全体の98%になっている。また、週1回にあたる年間35時間以上の授業時数を予定している学校は、5年生で57.6%、6年生で57.8%、平均授業時数は5、6年生ともに28.2時間となっている。

一方、中学校の外国語科（以下、英語）では、授業時数が週3時間から週4時間へ増加されることや、必修の語数が増加されるということが話題になったが、実際にどのような授業実践を行えばよいか、また、外国語活動との接続はどうしたらよいかということについては、まだ真剣な議論が始まっていない、というのが筆者の実感である。

本稿では、新しい教育課程への移行期間に、小学校の外国語活動、中学校の英語でどのような取り組みが行われているか、また、新しい教育課程に向けてどのような実践に取り組んでいけばよいかを述べてみたい。

1 小学校・外国語活動の取り組みと課題

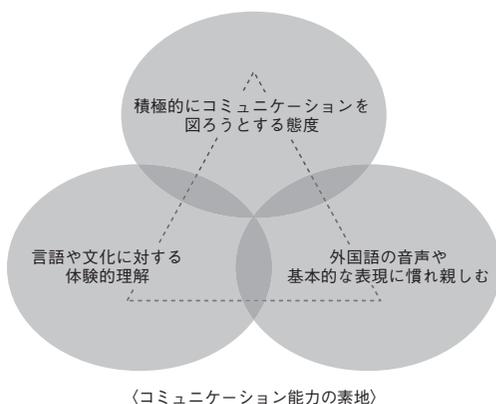
(1) コミュニケーション能力の素地

新教育課程への外国語活動の導入については、中央教育審議会での議論でも賛否が最後まで割れ、最終的に学習指導要領の中に「コ

ミュニケーション能力の素地を育てる」ということを目標に、第5・6年生に導入されることとなった。「コミュニケーション能力の素地」という新用語については、分かりにくいという声を小学校の教師から聞く。外国語活動の目標には、

外国語を通じて、①言語や文化について体験的に理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。（丸数字は筆者による。）

とあり、①、②、③の3つが重なり合いながら、「コミュニケーション能力の素地」を形成していく下図のようなイメージになる。



このように目標の関係をとらえ、この図を指導案中に提示すれば、授業や授業中の活動がどの目標を意識しながら行っているかを明示でき、3つの内容がバランスよく配置されているかどうかを確認する見取り図となる。例えば、チャンツやリズムによる口慣らしの活動は、子どもたちも抵抗なく、楽しんで取

り組む活動であるが、これは上で述べた3つの目標のうち「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことを狙った活動である。したがって、そこで英語と日本語の音やリズムの違いなどに気が付くことにつながっているか、あるいは、この活動が、他の2つの円と関わり合いながら、「コミュニケーション能力の素地」をどのように支えているのかを意識することが大切であり、楽しいからといってチャンツばかりでは、外国語活動=反復練習だという認識が児童たちに生まれてしまいかねない。

(2) 教師の意識や研修ニーズの変化

校内研修や地域などで行う一斉研修では、授業ができるか不安だという声を先生方から聞く。「どうしてやらなきゃいけないんですか」という声は少なくなってきたが、その問いに対しても、「必修になったからです。今はとにかく教え方を考えましょう」では何の解決にもならない。「思考停止」が一番怖い。外国語活動を通して、どのような児童の学びが生まれるのかを考え続けてみたい。

移行期間に授業実践を経験された先生の様子を見ると、その不安や意識に変化が見られるようになってきた。例えば、昨年末にある自治体では、小学校の教員を対象に、外国語活動に関して教師が抱えている不安や研修のニーズについて調査したが、その結果によると、「外国語活動の指導全般に対して不安を感じるか」という質問に対して、外国語活動の指導経験の有無にかかわらず、回答した50%強の教師が不安を感じていた。しかし、指導内容を細分化してたずねてみると、指導経験ある・なしで回答傾向がやや異なっていた。例えば、「積極的に外国語を聞いたり、話したりさせること」、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しませるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさ気付かせること」、「クラスルーム・イングリッシュを用いて児童に指示を出し、授業を進めること」という指導内容に対しては、指導経

験のある群が指導経験なし群よりも低い不安感を示す傾向にあった。つまり、少なくともこの1年間で外国語活動の指導を行った教師は、外国語活動で扱われる「英語」の内容に対して理解を深め、それまで抱いていた不安を軽減できたのではないかと推測される。もちろん、指導経験のある教師は、そもそも外国語活動に対して意欲的であり、英語を得意とする教師である可能性は大いにあるので、過度の一般化はできないが、少しでも実践の経験を積むこと、あるいは、他の教師の授業を見て研修を行うことが、不安感を下げるのに有効だと思われる。

また、同じ調査からは、外国語活動の指導一般に対して不安感を強く感じる教師群は「クラスルーム・イングリッシュの使い方」、「歌やゲームなど活動の進め方」、「ALTとのチーム・ティーチング」に関する研修を多く希望するのに対し、不安感を感じない群は、「指導計画の立て方」、「評価の行い方」に関する研修を希望する傾向にあることも分かった。少なくとも1年間の外国語活動の実践を経験し、不安感が低くなった教師は、毎時間の授業をどうつなぐか、また、学びの成果をどのように見取るかといったことに対する研修のニーズを持ち始めている。今後は、校内研修とともに、学校や個人のニーズにあわせた研修、特に、指導計画や単元計画に焦点を当てた研修が必要となる。

(3) 「英語ノート」

いわゆる文科省が指定する拠点校では、自分たちで指導計画や教材を用意し、それに合わせた授業実践を進めていたので、平成20年度に「英語ノート（試作版）」が配布されたとき、教師たちは、使いにくいなああと口をそろえて言っていた。しかし、この2年間「英語ノート」で扱われている教材や活動を吟味していくうちに、これまで独自に考えてきた活動と類似したものやその発展型の活動も多く含まれていることに気付き、年度末には、「良くできている部分もある」と評価を変え

る教師も多かった。

拠点校の先生方は、自分たちの作ったカリキュラムという視点から「英語ノート」を眺めることができ、どう使うかよりも、教材を目の前の児童たちに合わせて、どう加工するかという意識があったのだと思う。一方、平成21年度に初めて「英語ノート」を配布された学校では、そのような視点が必ずしもあるわけではないので、どうしても「英語ノート」をどう使ったらいいのだろう、というハウツーに多くの教師の関心が向いている。まずはハウツーを学び学ぶこと、また、技の引き出しを多くすること自体は、何ら悪いことではないが、それが行き過ぎると、活動や経験の「パッケージ化」が進み、活動の中子どもたちの経験の豊かさや、次の授業へのつながりが忘れ去られてしまう。言い古された表現だが、児童たちが「英語ノート」を、ではなく、「英語ノート」で何を学ぶのかを考えたい。特に、どの児童も同じことを学ぶことを目的として作られた「英語ノート」には、一人ひとりの生徒が表現したい言葉が十分に準備されているわけではない。児童たちの声に耳を傾けながら、「英語ノート」を積極的に加工したり、独自教材を使ってみたい。

2 中学校・英語での取り組みと課題

先にも述べたように、中学校での新教育課程に対する反応は少し遅いなというのが筆者の印象である。教師からは「教科書が出てきてからでないと考えられません」という偽らざる、しかし、もう少し自分たちでも考えてみようよ、と思わざるを得ない声も聞く。

(1) 言語活動の統合

この数年間に現行の学習指導要領下での教育課程調査や学力定着度調査が行われ、英語では、中学生の「書くこと」に関する学力の定着に課題があるという結果が示された。特に、「まとまりのある内容を書く」という問題での正確率の低さ、無回答率の高さが指摘されている。

ただし、こういった調査で、書くことの問題（まとまりのある内容を3～4文で書かせる問題）は、必ず、テストの最後の方に出題されていた。つまり、生徒が最初から順番に問題を解いていったのであれば、スコアの低い「書くこと」だけが問題なのではなく、そこにたどり着くまでに「息切れ」している可能性もある。つまり、聞くこと、読むことのテスト問題の処理にも課題があるのではないかと、ということは容易に想像できる（この点で、一連のテストの妥当性については議論の余地があると思うが）。アウトプットの活動が減った結果、聞いたり、読んだりするというインプット系の力も落ちてしまうという悪循環が発生している可能性もある。

しかし、筆者は、この点について中学校の英語教員にやや同情的である。というのも、現行の学習指導要領では、音声によるコミュニケーション活動を重視されていた上に、週3時間の授業時数では、インプットされた内容をアウトプットする時間がなかなか確保できないからだ。この課題を克服するために、新教育課程では、授業時数が週3時間から週4時間に増加され、4技能のバランスと統合を考えた指導が重視される。

もちろん、授業時数を単に増やしても中学生の力を伸ばすことにはつながらない。中学校の英語の授業では、「基礎・基本の定着」を目指して、言語材料の反復と記憶の定着を狙った活動や指導法がさかんに用いられてきた。「基礎」が重要なのは誰も否定しないが、「基礎」の上にどのような「建物」を作るのかを考えることが重要となりそうだ。

基礎の上の建物を考えるときに大切なのは、建物の出来栄だけでなく、建物に合わせた基礎作りである。「まとまりのある内容を書くこと」が課題だと上で述べたが、だからといって、「はい、夏休みの思い出について5文くらいで書きなさい」といった活動をただ与えても課題の克服にはつながらない。実際に書き出すまでに、生徒たちの思考を耕

し、それをマッピングなどの手法で紙の上に引き出し、構造化するというステップを踏んだ基礎作りが重要だ。そして、生徒が書いたものを、教師が読んだり、あるいは、生徒同士で読み合う、発表するといった「読み手（聞き手）」を想定して書くこと（＝建物）が必要となる。日常生活を考えてみると、書くという活動は無目的に行われることはなく、何のために書くのか、だれに向けて書くのか、どのようなスタイルで書くのか、といった状況設定が必ずある。生徒にとって意味のある状況を設定した活動を考え、プロダクトとともに、プロセスを考えることで、「習得」から「活用」に向けて学習を発展させる手が見つかるといえる（この点については、英語教育関連書ではないが、三森 [2005] が参考になる）。

指導計画では、「大きな」言語活動（*ONE WORLD English Course* の Project のような活動）をいつ実施するかだけでなく、「帯活動」を行いながら、短い時間で日々の学びをどうつなぐかを意識することも大切になる（本多 [2009] が参考になる）。1年後にはどんなパフォーマンスができるのかという学習の到達度を意識すること、また、それをどのように評価するかということを経験して意識したい。

(2) 小中の連携

小中の連携については、学校や地域で取り組みが始まっているが、「小学校は中学校の良いところ取りをしている」、「中学校には中学校の学び方がある」と中学校の教師の反応は案外「冷たい」。気持ちはよく分かる。確かに、中学校の学びは小学校とは異なる。しかし、どう異なるのかを分析して授業に取り組んでいる中学校教師はそう多くはない。

例えば、外国語活動で児童たちは、表現を音声のチャンクとして記憶する。そのチャンクの表現に児童たちの身近な語彙を織り交ぜる形でコミュニケーションの活動を行う。一方、中学校では、表現のチャンクの中の語と

語のつながりや仕組みに気付くようになる。ここに文法知識の役割が出てくる。語と語のつながりや仕組みを知ることで、表現の創造性が増す。

チャンクの中の語と語のつながりは文字言語を学ぶことによって見えてくる。したがって、中学校に入ってくる生徒が持っているある程度チャンク化された表現の知識が、どのように文字と結びつくのかといった意識を高めるための指導法（フォニックス）を工夫する必要がある。同時に、読むこと、書くことの指導についても、文字を認識する、なぞる、写す、見ずに書くなどと、これまで以上に丁寧にステップを踏んだ指導を考えなければならない。

連携については、実際にお手伝いしてみて、さまざまな難しさを感じる。しかし、外国語活動を経験した生徒たちの学びの経験を断絶させずに、継続させ、発展させることが大切だ。このことは、日本の英語教育が直面する新たな、そして、重要な課題だが、この問題に取り組むためにも、中学校の先生方には、小学校の授業を参観したり、できれば、一緒に授業作りを行うことをお勧めする。「上から目線」ではなく、一緒に子どもを育てようという意識が共有されたときに、子どもたちの学びもつながり始める。そして、外国語活動での楽しさが、「ただしんどい」だけの中学校英語ではなく、創造性や知識の活用という新たな楽しさと難しさの体験につながってほしいと思う。

【参考文献】

- 三森ゆりか (2005) 『徹底つみ上げ式 子どものための論理トレーニング・プリント』PHP 研究所
- 本多敏幸 (2009) 『英語力がぐんぐん伸びる！ コミュニケーション・タイム 13 の帯活動 & ワークシート』明治図書出版